

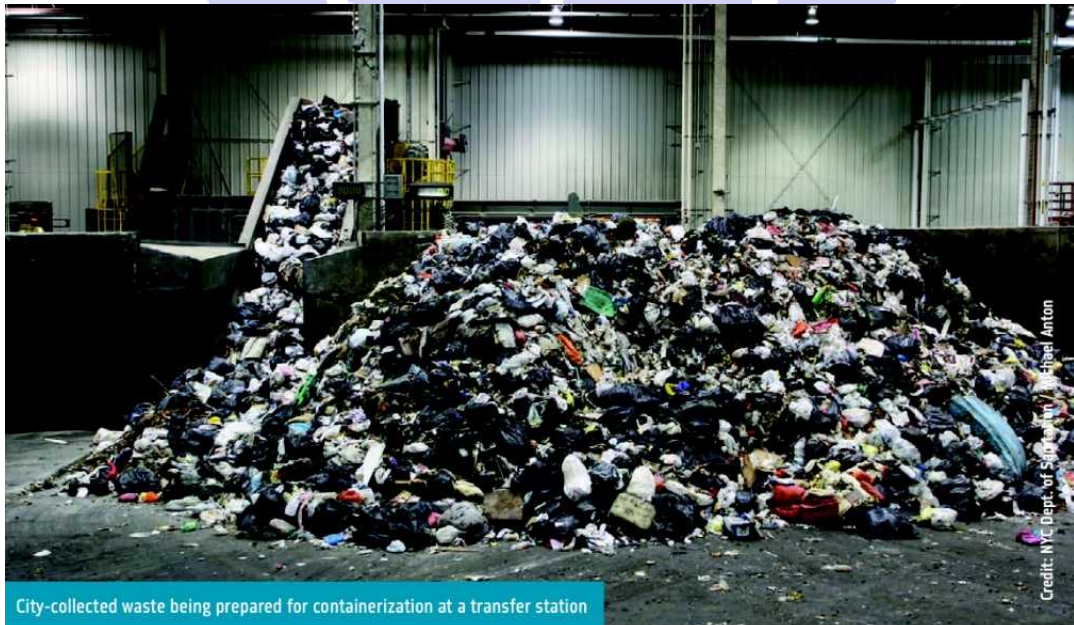
ボローの公平 (Borough Equity) ～廃棄物処理をめぐるニューヨーク市の挑戦～

ニューヨーク事務所

1. ニューヨーク市の廃棄物処理

ニューヨークでは、家庭、職場、道路、そして建設現場から毎年 1,400 万トン以上の廃棄物と再生可能物が発生している。これらの全てを 5 つのボロー(注)から収集するために、2,000 台以上の市有トラックと 4,000 台以上の民間トラックが使用されている。これらのトラックは満載の廃棄物をリサイクル施設や積替施設に運搬する。

1980 年代、市内の廃棄物は市営焼却炉と 89 箇所の市有埋立処分場において処分されていた。スタテン島のフレッシュキルズ埋立処分場は一時期、世界最大の埋立処分場として知られていた。焼却と埋立に対する反対が増すなか、多くの処分施設は廃止に追い込まれた。1990 年代半ばまでに焼却炉は閉鎖され、市はリサイクルを義務化した。唯一、フレッシュキルズ埋立処分場だけが存続し廃棄物の大半が市の運営する船舶積替ネットワークを通じ、はしけでフレッシュキルズに運び込まれた。1990 年代始めまでは、民間運搬業者のほとんどが事業系廃棄物をフレッシュキルズに廃棄していた。しかし 2001 年、市はフレッシュキルズを閉鎖し、市内で収集された廃棄物を州外に搬送するため、ブロンクス、クイーンズ、ブルックリンの一握りの住宅地域に整備された民間の積替施設に運搬し始めた。



廃棄物積替施設（収集した廃棄物をコンテナに積み替え州外に搬送する）

(注) ボロー (Borough)

行政区のこと。ニューヨーク市には、マンハッタン、ブロンクス、ブルックリン、クイーンズ、スタテン島の 5 つの区がある。

2. ボローの公平

一部の住宅地域が過度に廃棄物処理の負担を負う状況を改め、より公平なシステムを創設するため、ニューヨーク市は 2006 年に新たな廃棄物管理プラン（Solid Waste Management Plan : SWMP）を作成した。計画は「ボローの公平」実現のための戦略的道筋を描くものであった。ボローの公平とは、ひとつのボローで市が収集した廃棄物を他のボローに移送しないこと、また、全てのボローがそれぞれ固有の家庭系廃棄物用積替施設を建設することで、廃棄物処理システムが過度に負担を与えている住宅地域の影響を最小化するものである。

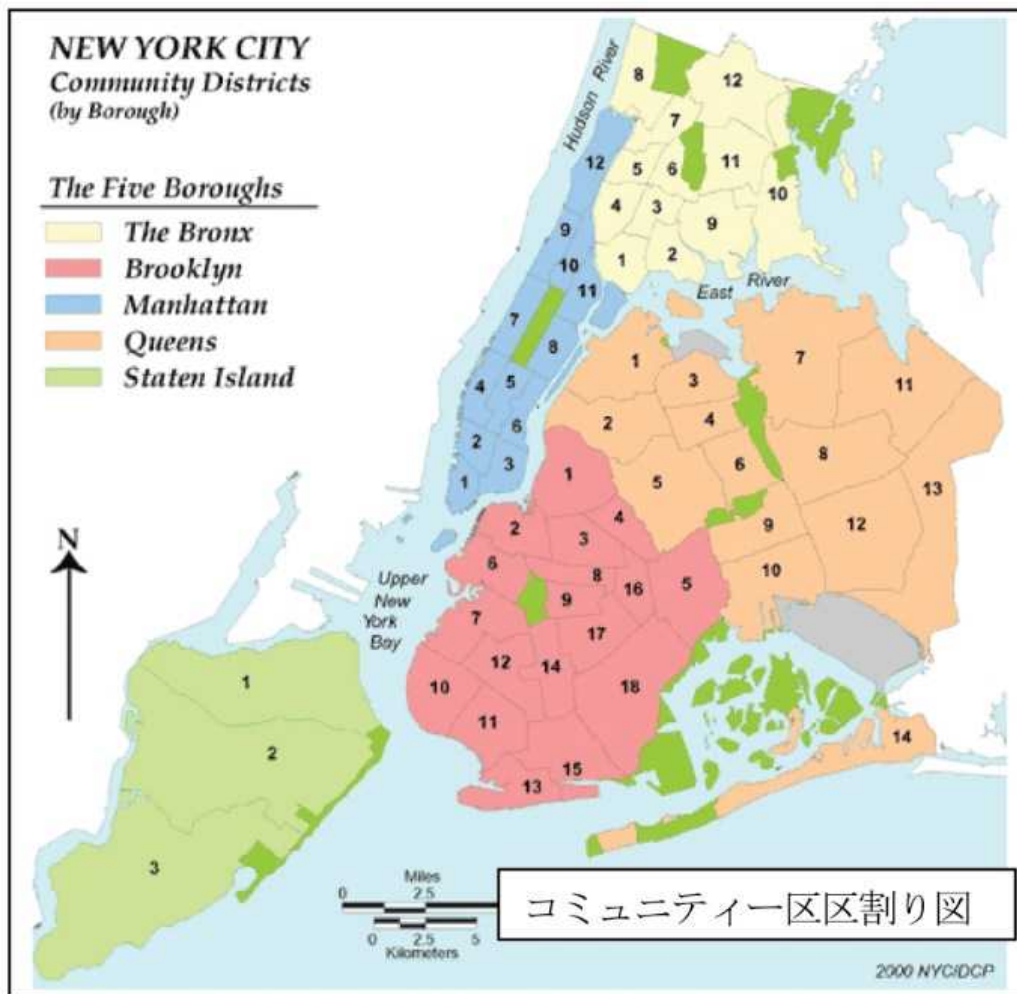
過去 30 年間にわたり、ごく限られたコミュニティが廃棄物が引き起こす影響の矢面に立ち続けてきた。中でも最も影響を受けていたのが、何千トンもの廃棄物が収集トラックから長距離トラックや鉄道貨車に積み替えられる、廃棄物積替施設集積地に近接した住宅地域に住む人々である。SWMP はこうした問題に対処するため、「ボローの公平」を中心理念として掲げた。

3. 資源回収・リサイクルの促進と新規施設の建設

ニューヨーク市の長期計画 PlaNYC では、「ボローの公平」とともに、廃棄物そのものを 75%削減するという目標を設定し、転換率（一般廃棄物から回収される資源の割合）の向上を目指している。既存の処分方法に替わる最新技術を用い資源回収、リサイクルを行い、廃棄物の資源への転換に取り組むため、2013 年にはブルックリンに大規模リサイクル処理施設を新規オープンさせることが明記されている。この PlaNYC の計画に基づき、本年 3 月 6 日、ブルームバーグ市長は最新鋭技術を用いた廃棄物クリーンエネルギー転換施設の建設を求める提案依頼（Request for Proposal）を発表した。提案書の提出期限は本年 6 月 5 日であり、市は最もクリーンで最新のエネルギー転換技術を採用するとしている。決定プロセスには「ボローの公平」を確保するために計画、承認、実施、建設、試運転、本稼働全ての段階で施設建設予定地周辺住民の参加が保証されている。

4. コミュニティ・ボードの反応

ブルームバーグ市長の提案依頼発表直後の 3 月 13 日、コミュニティ・ボード（ニューヨーク市憲章に基づく市民参加制度、市内を 59 のディストリクトに分けている）のひとつ、ブルックリンのコミュニティ・ボード No.1（CB1）の月例ミーティングにオブザーバーとして参加する機会を得た。CB1 はブルックリン最北端に位置し、川を挟んだ対岸はクイーンズである。近年、中産階級の白人層が移入しつつあり、ウィリアムズバーグなど若者に人気の街も含むディストリクトであるが、歴史的に廃棄物積替施設が立地している場所でもある。



ミーティングの冒頭、事務局長（District Manager）がディストリクトに関連する最近の状況について報告を行ったが、その中で“Resolution to Oppose the Siting of Proposed Facility to Convert Waste”（提案中の廃棄物転換施設用地選定に対する反対決議）という項目が、まさに上記の提案依頼に関連したものであった。CB1の反応をひと言で言えば、「全員一致で大反対」である。

事務局長の発言は、「我々のディストリクトは常に廃棄物処理の負担を強いられてきた。“最新鋭のエネルギー転換施設”により我々の負担は更に増すだけである。クイーンズの廃棄物施設も川の直ぐ対岸にあり、有害物質が風により全て我々のディストリクトに運ばれてくる。引き続き声を大にして反対していく」というものであった。参加者の事務局長への賛意と建設計画へのブーイングで会場は異様な熱気に包まれた。ミーティングの終了後に話を聞いた市民のひとりには、「ボローの公平を謳う SWMP や PlaNYC はきれいごとだ。冊子や市のホームページの情報だけで判断しないで欲しい。我々のディストリクトは常に不公平に苦しんでいる」と我々に訴えた。

5. 市民参加の重要性

折しも、NY 事務所では現在、自主調査として PlaNYC の翻訳と分析に取り掛かかっており「廃棄物」の章の翻訳を仕上げた直後である。CB1 への出席は「より環境に優しくより素晴らしいニューヨーク」(Greener, Greater New York) を PlaNYC のスローガンとして掲げ「ボローの公平」謳う市側の立場と、住民側の認識の差を目の当たりにする貴重な機会となった。勿論「ボローの公平」という言葉だけでは、住民の利害を調整することはできず、仮に「ディストリクトの公平」を謳っても住民一人ひとりの利害を解決する計画を作り上げることはできないだろう。しかしコミュニティ・ボードのように、あらゆる段階で市の計画に「声を上げる」仕組みが確保されていることは市民の行政への関わり方を考えるうえで非常に興味深いものである。6 月の提案書提出以降も新施設建設に関する議論は続くであろうが、議論を通じて「ボローの公平」の理念がどのように住民一人ひとりの納得を得ていくのか、注目していきたい。

(園原 隆次長 東京都派遣)

